

WESTERN WOMEN —THEIR LAND, THEIR LIVES—

「アメリカ西部開拓史に埋もれた女性たちの実像を求めて」

吉田かよ子

1. 背景

WESTERN WOMENは、アメリカ合衆国建国以来、拡大し続けたアメリカ西部のフロンティアに生きた、多様な民族的、階級的、宗教的背景をもつ女性たちの実体を調査したアメリカの歴史学者たちの研究記録を一冊の本にまとめたものである。

母体となったのは、1984年1月にアリゾナ大学南西部女性学研究所 (South-West Institute for Research on Women / Women's Studies—略称SIROW) がアリゾナ歴史学会と共同で開催した、同名の会議であった。

この会議の出席者は地理的には全米、カナダから集まり、民族的にもアメリカン・インディアンやヒスパニック系アメリカ人の歴史学者を含め、女性学の立場からアメリカ西部史を再構築するという、新たな研究分野での歴史的会議となった。

3日間の会議で取り上げられた論文の多くが、この本の中に集録されているが、その後の編集過程での大幅な加筆、修正、新たな原稿依頼等によって、完成した本は会議の議事録的な性格を脱して、学術的意義を高めている点が注目される。

全体として、二部構成の形態をとり、第一部 STARTING POINTS (出発点)、第二部 NEW DIRECTIONS (新たな方向) の大枠の中に論文が収められている。第一部は四つの章からなり、アメリカ東部における女性学研究から西部史に投影されたテーマの追求、および現在の女性史研究上の問題点が主に提起されている。

第二部は、ますます異質な文化が並存、共存していくであろうアメリカの歴史の中で、学際化していかざるをえない女性学研究的の将来の方向を提示するような論文を中心に構成されている。

それぞれの章はすべて、(1)編集者による前文、(2)中心となる命題を提示し

ている主論文、(3)2人ないし3人の学者による主論文に対する評論（コメンタリー）、の同一形態にまとめられている。なかでも、主論文に対しての複数のコメンタリーの存在が、アメリカ西部史に女性学の立場からアプローチするというアメリカ歴史学上の新展開を論じる際に陥りがちな独善性を廃し、あらゆる論調に客観性を与える重要な役割を果たしていることは、評価に値する。

2. 出発点：検証－フロンティアと女性

アパラチアから太平洋岸に至るまで、アメリカ建国、およびアメリカの文化形成に果たしたフロンティアー辺境の役割は、常にアメリカ史の中心命題の一つであり続けた。西へ西へと移りゆくフロンティアの存在が、アメリカ人気質や、アメリカ経済および社会構造の基幹形成に及ぼした多大な影響については、フレデリック・ジャクソン・ターナーをはじめとする多くの歴史家の研究対象となり、アメリカ人のイマジネーションを駆り立てるテーマであったことは、周知のことであろう。

しかし、ひとたびオフィシャル・ヒストリー（公の歴史）を離れて、民衆史の視点からフロンティアを検証するとすると、残された資料の発掘作業も含めて、いまだ揺籃期にあるといわざるをえない。そうした中で、本書の第一部では、アメリカおよびカナダのフロンティアに生きた様々な立場の女性たちの研究に関する両国の第一人者の研究成果を紹介している。

第一章では、オクラホマ大学ノーマン校のロバート・グリスウオルド（Robert Griswold）が、19世紀から20世紀初頭のアメリカ西部におけるアングロサクソン系の女性にみられる家庭第一主義が一つのイデオロギーとして定着していた点に注目している。

第二章で、ワシントン州立大学プルマン校のジャクリーン・ピーターソン（Jacqueline Peterson）は、1700年以降隆盛を極めた五大湖以西の毛皮交易に携わった白人男性とアメリカンインディアン女性の結婚によって誕生した多くの“Metis”とフランス語で呼ばれる混血児（とくに女性）達のつくりあげたメティス文化とその宗教心理を詳細に取り上げた。

本書の編者の一人であり、アメリカ西部史における女性・家族研究の分野で、現在最も注目を集める学者の一人であるリリアン・シュリッセル（Lillian Schlissel）が、第三章の主論文を著している。シュリッセル教授は、ニュー

ヨーク市立大学ブルックリン校アメリカ研究科長をつとめ、1982年に出版した著書 Women's Diaries of the Westward Journey で、それまでほとんど取り上げられることのなかった、西部開拓における家族の生活史にはじめて光をあてた。

本論文の中でも、エール大学ビーネック図書館を中心に調査した、陸路で大陸横断をした家族（オーバーランダー）と共に西部に定住した女性たちの103の日記、日誌、手紙をもとに、シュリッセルはアメリカ大陸の定住という大事業をになった最も重要な組織（institution）としての家族の存在の輪郭を浮かびあがらせることに成功している。

ヨーロッパ系アメリカ人の中産階級で、読み書きのできる女性に対象が限定されていることや、一般化するには基礎となるサンプルが小さすぎることに、それに書き留めるという作業に対する当時のビクトリア朝的女性観が障害になっているのではという懸念など、その成果の限界を指摘する声もあるが、丹念な資料収集と、客観的統計の組み入れに基づくシュリッセルの主張は十分に説得力を持つものである。

第一部の最終章では、カリフォルニア大学デビス校のビッキー L. ルイズ（Vicki L. Ruiz）が1930年から1950年の20年間にわたる西部5州（コロラド、アリゾナ、ニューメキシコ、カリフォルニア、テキサス）でのメキシコ人および、メキシコ系アメリカ人女性（Mexicana/Chicana）の労働市場での雇用状況を統計を多用して解説している。

それぞれ、異なった時代に西部に生きた様々な階層と民族グループに属する女性たちに焦点をあて、西部開拓史のなかで忘れられた女性の存在を浮かびあがらせることを主眼としているが、なかでも、1848年からの約20年間に陸路太平洋岸をめざした約350,000人といわれるオーバーランダーの一家族を追うシュリッセル論文の内容はその時代背景ともあいまって読者をひきつけずにはおかない。

次節では、このシュリッセル論文を中心にアメリカ西部のフロンティアに生きた家族に注目してみたい。

3. フロンティアに生きたある家族の歴史

シュリッセルがヨーロッパ系アメリカ人家族のオーバーランダーの典型として本書で取り上げているのは、ジョージとアビゲイル・マリック夫妻であ

る。

SIROWの会議での発表だけではなく、教授が寄稿している他の論文集(Making America, The Society and Culture of the United States, edited by Luther S. Luedtke)の中でもマリック家の家族史を紹介しているのは、シュリッセルが、この家族のたどった運命の中に、19世紀中葉にオーバーランダー達が抱いた夢と現実の凝縮された姿を見ているからに他ならない。

マリック夫妻は、中西部を襲った1837年の農業不況がきっかけとなって1840年代におこった太平洋岸北西部、当時のオレゴン・テリトリーへの移住者の群れの一員である。

ペンシルバニアのドイツ・ルーテル派新教徒の家系の出であるマリック夫妻は、家族の構成、社会階層、教育程度、宗教的背景、それに経済基盤のどれをとっても、当時の東部から西へと移動したヨーロッパ系アメリカ人(Euro-American) 家族の典型であると考えられる。

一家はまずイリノイへ移住し、そこで長女メリーアンは結婚し、自分の家庭を築くことになる。1848年の夏、一家は長女とその家族をイリノイに残し、3人の息子と3人の娘を連れて、さらに西へとより良い生活を求めて移住していくことを決意する。

無償の自営農地と温暖な冬というオレゴン準州の魅力は、当時大多数が農民であったヨーロッパ系アメリカ人たちには坑しがたいものであったことは想像に難くない。

移住や地理に関する政府からの情報提供も便宜も皆無の状態の中で、アメリカン・ドリームを求めて西部へと旅だった人々の身の上に日常的に起こった出来事を、シュリッセルは、アビゲイルがイリノイに残した長女メリーアンにあてた多くの手紙を元に、1848年から約二十年間の一家の物語として再構築し、読者に提供する。

「よりよい生活を求めて」という当時西部へ移住した人々に共通する理想を持ってオレゴンへと旅だった一家を待ちうけていたのは、家族が生きていくにはあまりにも脆弱な西部の生活環境の中での一家離散の歴史である。

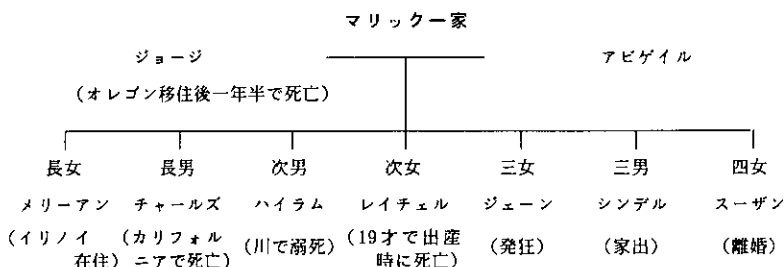
旅の途中でまず当時17才の次男ハイラムが川で溺死する。オレゴン・テリトリーに到着した一家はコロンビア・シティ(現在のワシントン州バンクーバー)に定住し、1850年に連邦議会を通過した自営農地寄贈法(Donation Act)によって、夫婦それぞれ320エーカー、合わせて640エーカーの肥沃な

農地を手にいれ、当初の目的は達せられたように見える。

その間に、カリフォルニアのゴールドラッシュの情報を聞いた長男のチャールズが一獲千金を夢みて、カリフォルニアに旅立つ。しかし金鉱で儲けた金を持ち帰るはずのチャールズはオレゴンへの帰途、暴漢に襲われて、全財産を奪われ、ショックのあまり狂死したことが家族のもとへ伝えられる。

その後は、オレゴン移住後一年半で、夫ジョージが死に、あとを追うように17才で結婚した次女レイチェルが二度目の出産の折に死亡する。わずか19才であった。たった一人残った男の子である三男のシンデルは、農業を嫌い、学校へも行かず、近くのバンクーバー砦の将校たちと競馬や賭博に明け暮れる生活を送るようになる。

三女のジューンは15才の時にこうした将校の一人と婚約するが、この早すぎた男性との結び付きが彼女の神経を冒し、ついには発狂してしまう。末娘のスーザンは16才で墮落ちし、母の反対を押し切ってその後結婚するが、夫の暴力を理由に離婚を申し立て、それが認められると、旅回りの劇団に入って各地を転々とする人生を歩む。



ふるさとに残してきた家族との別離と望郷の念、西部へ向かう際の溺死や事故死、出産時の死亡や乳幼児の死亡、発狂、離婚など、マリック一家を次々に襲う不幸を、シュリッセルは、この一家だけの特殊な事情ではなく、フロンティアではすべて日常的な出来事であったことを実証しようとする。

筆者が収集した103件の西部へ移住した女性たちの日記、日誌、手紙からのデータや当時の国勢調査、議会記録、西部各州で発行された個別の報告書等を引用しながら、シュリッセルはこの「一家族の歴史の普遍化」に限定的に成功しているといつてよいだろう。

この作業を通して、シュリッセルが強調したかったのは、今まで歴史家の

研究対象になることのなかった、フロンティアの持つアメリカの家族関係に与えた遠心分離的な作用である。19世紀のアメリカの、絶え間ない移民の流入と国内での移動、南北戦争、奴隷制の廃止、工業化、伝染病といった、シュリッセルが言うところの「時代の大きなうねり」— great whirling motion —は伝統的な家族をまるで遠心分離機にかけたようにばらばらにしてしまった。フロンティアは、まさにそうしたうねりの一つであったのである。

家族が離散していくのを、懸命に食い止めようと孤軍奮闘するアビゲイルの様子は、引用されている長女にあてた多くの手紙の内容からも明らかであるが、こうした時代の大きなうねりのなかで、必死で家族という組織 — institution — を守っていこうとする、いわばその求心的な力の中心に位置したのはこうした母としての、妻としての女性たちだったのである。

しかし、女性たちが必死で守ろうとした家族の絆も、フロンティアのもつ無秩序な環境の中では、「包囲された理想」— an ideal under siege —であった、とシュリッセルは指摘する。

西部への移動という行動そのものが、多くの場合、親兄弟や姉妹との決別を意味していることから考えても、アメリカ人のもつ家族に対する本質的に二律背反的な考えをそこに見て取ることは、むずかしいことではない。

シュリッセルはマリック一家の家族史を通して、従来の単純で牧歌的という画一的なフロンティアの家族像に挑戦し、現在のアメリカ人たちが自分の意志で家族から離れていく姿を、フロンティアに生きた前世紀の家族の姿に重なり合わせて、アメリカの家族のアンビバレンスの根源にせまろうとしているのである。

4. 新たな方向を模索して

端緒についたばかりの西部史への女性学的アプローチは、第一部では、それぞれの分野での先駆的研究で知られる人々の、すでに認知された業績の紹介が主たる目的であった。グリスウールドとシュリッセルは、当時の女性たちの残したジャーナルや手紙などのいわばreflective writingsの内容を裁判所記録や公式のデータで裏打ちすることによって、ヨーロッパ系アメリカ人の識字能力のある、中産階級の女性たちにとっての西部、にひとつの結論を導き出すという方法論を用いている。

少数民族グループの女性たちに関しては、ピーターソンが18世紀以降五大

湖周辺に一つの文化圏を築いたメティス—白人男性とインディアン女性の間—に生まれた混血児—の存在に注目し、ルイズは20世紀の西部5州におけるメキシコ系アメリカ人女性の労働市場での差別的処遇を通して、マイノリティで女性という二重のハンディのもとで生きるグループの存在を印象づけた。

このように、「西部の女たち」というテーマに個別にアプローチする第一部での従来の歴史学、アメリカ研究、女性学の方法論から一步踏み出そうと試みている人々を紹介するのが、第二部の目的である。

五つの章からなる第二部の主論文に共通するのは重層的で比較文化的(cross-cultural, inter-cultural)な視点の導入である。

それは、アメリカ国内での異なる民族的背景の女性グループ間の価値観の相違に着目したものであったり、国際的な比較であったり、新たな学際的視点の提示であったり、とさまざまではあるが、この分野の第二世代の学者たちの台頭を実感させるに十分である。

まず第五章では、ニューメキシコ大学のベラ・ノーウッド (Vera Norwood) が、西部の景観—landscape—に対する女性たちの反応を、ヨーロッパ系アメリカ人、アメリカン・インディアン、ヒスパニック系アメリカ人の空間概念の違いをもとに分析している。

家庭第一主義のイデオロギーを最優先し、西部の外部空間に対して女性たちは無関心であったという19世紀のアングロサクソン系女性の価値観のみを取り上げた伝統的主張を疑問視し、女性の比較空間論にスポットを当てたノーウッドの論文は、新鮮で、今後の研究のすそ野の広がりを感じさせるものである。

第六章では、マウント・ホリヨーク大学のジョン・マック・ファラガー (John Mack Faragher) が、アメリカン・インディアン女性と毛皮交易に従事する白人男性の結婚が、カナダおよび国境周辺部でのおもにフランス人男性のみにとどまらなかったことを報告している。

こうした人種間結婚は、限られた地域での、経済的利害を優先した、短期間のものであったという画一的見方が、これまで大勢を占めていたように思われる。

ファラガーは、カナダ西部での大規模なメティス社会に見られる永続的な婚姻関係が、アメリカのフロンティアにも存在していた実例を紹介し、現在の米加国境の存在に関係なく、広範囲な毛皮の狩猟、交易地域でのアメリカ

ン・インディアン女性と白人男性との結び付きの強さを強調する。

第七章ではさらに、マイノリティでかつ女性という二重の社会的、経済的ハンディキャップを負ったインディアン女性の法的権利の変遷を取り上げている。

アリゾナ州の弁護士ジュヌビエーブ・チェイトー (Genevieve Chato) とアリゾナ州ツーソンのオールド・プエブロ博物館のクリスティーン・コント (Christine Conte) が、アリゾナに住むナバホ族インディアンの女性が、部族、州、連邦政府という自分たちを取り巻く多層の法律社会の中で、どのような権利を付与される (または、されない) に至ったかを調査した記録である。

第八章は、スタンフォード大学の博士過程の学生であるアントニア・カスターネダ (Antonia Castañeda) による、これまで着目されたことのない、フロンティアに生きる女性の国際比較の試みを紹介したものである。

世界の多民族国家のなかでも、19世紀アメリカの西進運動に匹敵するような建国の経緯を持つ国として、ニュージーランドとカナダを選び出し、同時期の英語圏のフロンティアの女性の生き方の比較を試みている。

ここでも、読み書きのできる中産階級の女性の残した資料が中心となっていることによる研究の限界を筆者も認めてはいる。しかし明らかに異なった女性の海外移住奨励策をとった英国の移住政策との比較など、アメリカ西部に生きた女性を全く異なった視点から見すえる格好の研究対象を提供している。

本書の最終章は、それまでの論文とは全く異なった角度から、アメリカ西部の女性史を解釈しようという、アメリカ議会下院のスタッフであるヘザー・ヒューイック (Heather Huyck) の論文でとじられている。

アメリカ西部各州に点在する歴史的建造物や史跡には、たいいていの場合それぞれのヒーロー (それは過去の米国大統領であったり、伝説的人物であったり、伝道師であったりする) が存在する。ヒューイックの提案はそうした無数の過去の遺産の中に男性の陰に生きた女性の存在を読み取り、そうした女性の存在を通して西部史を読み変えていく、そのためには管轄官庁への働きかけによって展示方法やパンフレットに女性中心の発想を反映させる、といった実務家らしい提案である。今は、思い付きの域にとどまっているという印象を受けるが、こうした地道で具体的な働きかけが、新しい研究分野の

拡大には必要なことなのであろう。

5. ジョン・ウェインを越えて

アメリカを学ぶものにとって、19世紀ほどつきない魅力に満ちた世紀はない。1803年のルイジアナ併合による国土の倍増、ヨーロッパからの大量移民、南北戦争、大陸横断鉄道の開通、都市の勃興、産業資本家の台頭、そしてフォーティー・ナイナーズに代表される西部開拓とフロンティアの消滅。

なかでも、フロンティアの存在が、アメリカン・ドリームと結び付き、アメリカの社会・経済的基盤形成の根幹をなしたことは疑う余地がない。

しかし、20世紀に入って、映画に代表される大衆文化の隆盛は、フロンティアのイメージを消費しつくした感がなくもない。

Western Womenは、そうしたアメリカン・フロンティアのイメージに果敢に挑戦し続ける人々の情熱と地道な研究活動を強く印象づける。

挿入されている多くの当時の写真に残された名もない女性たちの目に写るフロンティアは、まさにカレドスコープのように、見る人によって異なる模様を映し出す。そして読者は、その万華鏡の世界とその向こうにある現実を見ることができるのである。

明らかに学術書でありながら、読者をひきつけてやまないのは、つきることのないフロンティアという大地の持つ魅力と、そこに生きる女性たちに対する研究者たちの共感のなせる技であらう。第一部の論文集の完成度の高さに対して、第二部がその発想や方法論の斬新さも含めて、荒削りなものが多かったのも、新たな研究分野であることを認識させる結果となった。

しかし、すべての読者が次のことを感慨を込めて理解することができたところで、この本の目的は、十分に達成されたと言えるかもしれない。

— フロンティアはジョン・ウェインと騎兵隊が通り抜けて行っただけではなく、多くの家族たちも通っていったのです。—

—It wasn't just John Wayne and cavalrymen riding through the frontier, but families as well. (Thomas Crowson, National Park Service interpreter)

— * * * —

Western Women—Their Land, Their Lives, Edited by Lillian Schlissel, Vicki Ruiz, and Janice Monk, University of New Mexico Press 1988.